

23	25					24	23	22	21	20			
一〇一六	一〇一五					一〇一四	一〇一三	一〇一二	一〇一一	一〇一〇			
水	火					月	日	土	金	木			
新京着前	大連發後	大連着後	旅順發後	旅順着前	大連發前	大連着前	門司發	門司着	神戸發	神戸着	東京發後	上野着後	日光發後
八〇〇	八〇〇	四五〇	三三〇	一〇二〇	九〇〇	八〇〇	正午	正午	正午	前一〇二四	後一〇二五	後六二三	後三〇五
	急一五		バス		バス		"	"	大阪商船		急一九		八二六
本 新 前 二 テ 三 三 校				旅順發前見學 酒家發前									中 禪 寺 前、 華 嚴 ノ 洞
	車 中						船 中	船 中	船 中		車 中	東 京	

別紙添付 長經由

兵器本部 録由第 二八四號

名造甲第一、一〇四號

第

第其



外國人工工場參觀狀況報告書提出ノ件

昭和十五年十月九日

名古屋陸軍造兵廠長 白倉司馬太

陸軍大臣 東條英機殿



九月二十一日附陸普第六六五九號通牒ニ依リ許可セラレタル日本特殊陶業株式會社ヲ滿洲國人參觀セシニ付別紙ノ通狀況報告提出ス

了

尾 4481

兵器本部

日特第貳、六貳壹號

名古屋陸軍造兵廠經由

卷 四四八四

滿洲國人工場參觀實施狀況ノ件報告

昭和十五年拾月參日



工場監督 官認印	(丹羽)	會社又ハ 工場代表 者認印
-------------	------	---------------------

名古屋市昭和區堀田通壹丁目拾七番地

日本特殊陶業株式會社
常務取締役 市邊眞清

陸軍大臣 東條英機 殿

昭和十五年九月廿一日附陸普第六六五九號ヲ以テ御許可相受ケ候
首題ノ件左記ノ通實施セシメ候條此段及御報告候也

左記

一 參觀日時	昭和十五年十月三日午前十時ヨリ十一時三十分迄
二 參觀者ノ國籍	滿洲國



4484

參觀者ノ氏名身分
又ハ職業

劉	羅	盧	王	金	干	馬	張	段	趙	王	王	後	章	生
繼	振	漢		谷	民	魁	紹	知	元	志	果	藤	述	田
煇	宸	周	注	昇	任	選	宗	經	相	遠	忱	太	薪	美
												丸		肥

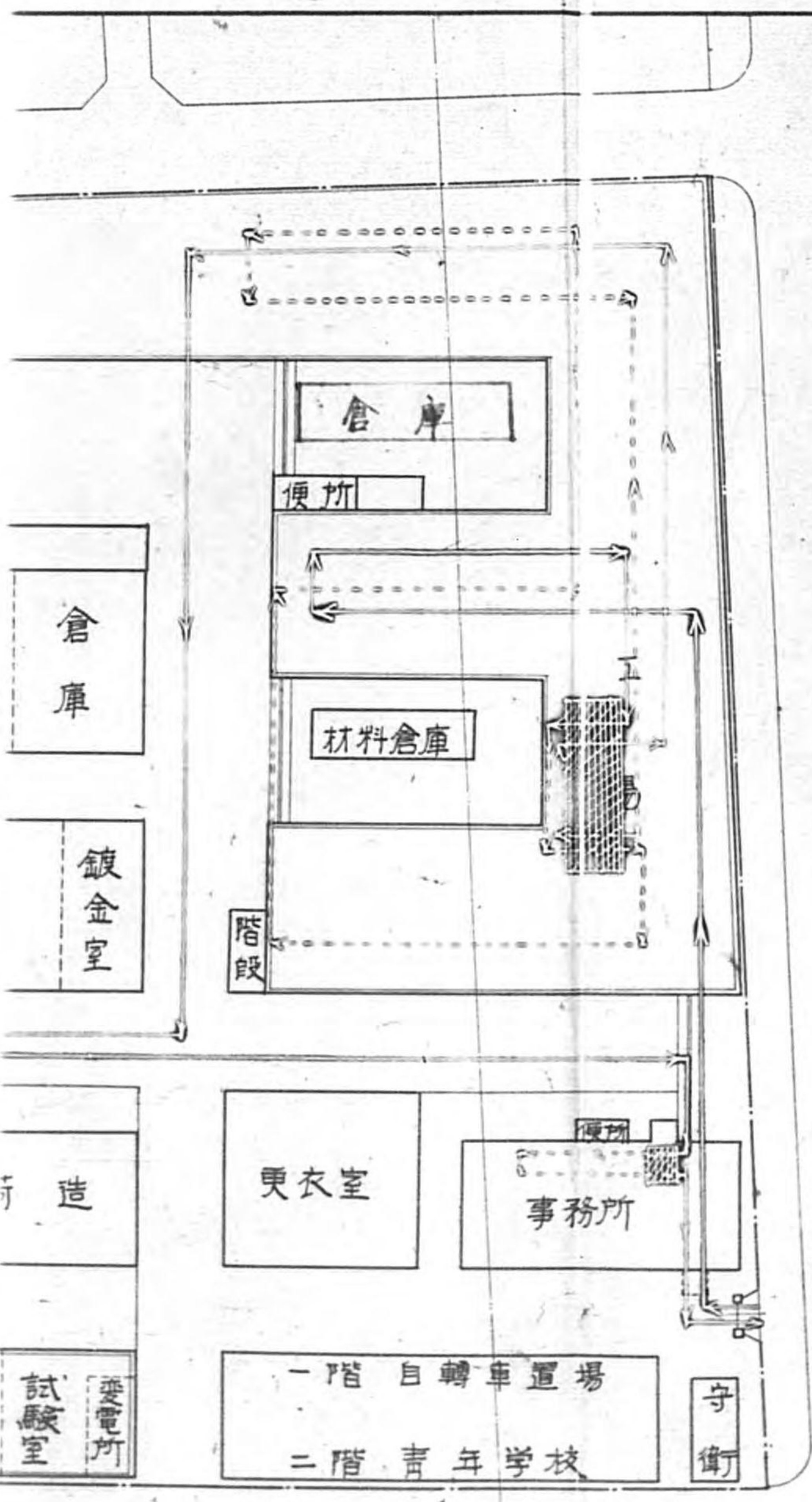
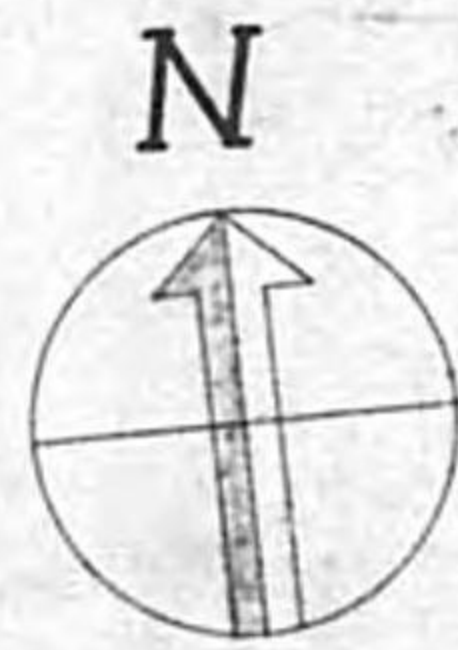
奉天省新城子國民高等學校長	奉天省沙嶺堡國民高等學校長	奉天省八面城農業學校長	通化地方師道訓練所教官	間島省延吉國民高等學校教諭	哈爾濱第二國民高等學校教諭	濱江省呼蘭國民高等學校教諭	三江省佳木斯國民高等學校教諭	北安省望奎國民高等學校教諭	龍江省安廣農業學校校長	吉林省第一國民高等學校教導	吉林省九台農業學校長 (團員)	民生部教育司屬官	民生部教育司高等官試補	民生部教育司教學官 (團長)
---------------	---------------	-------------	-------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	-------------	---------------	-----------------	----------	-------------	----------------

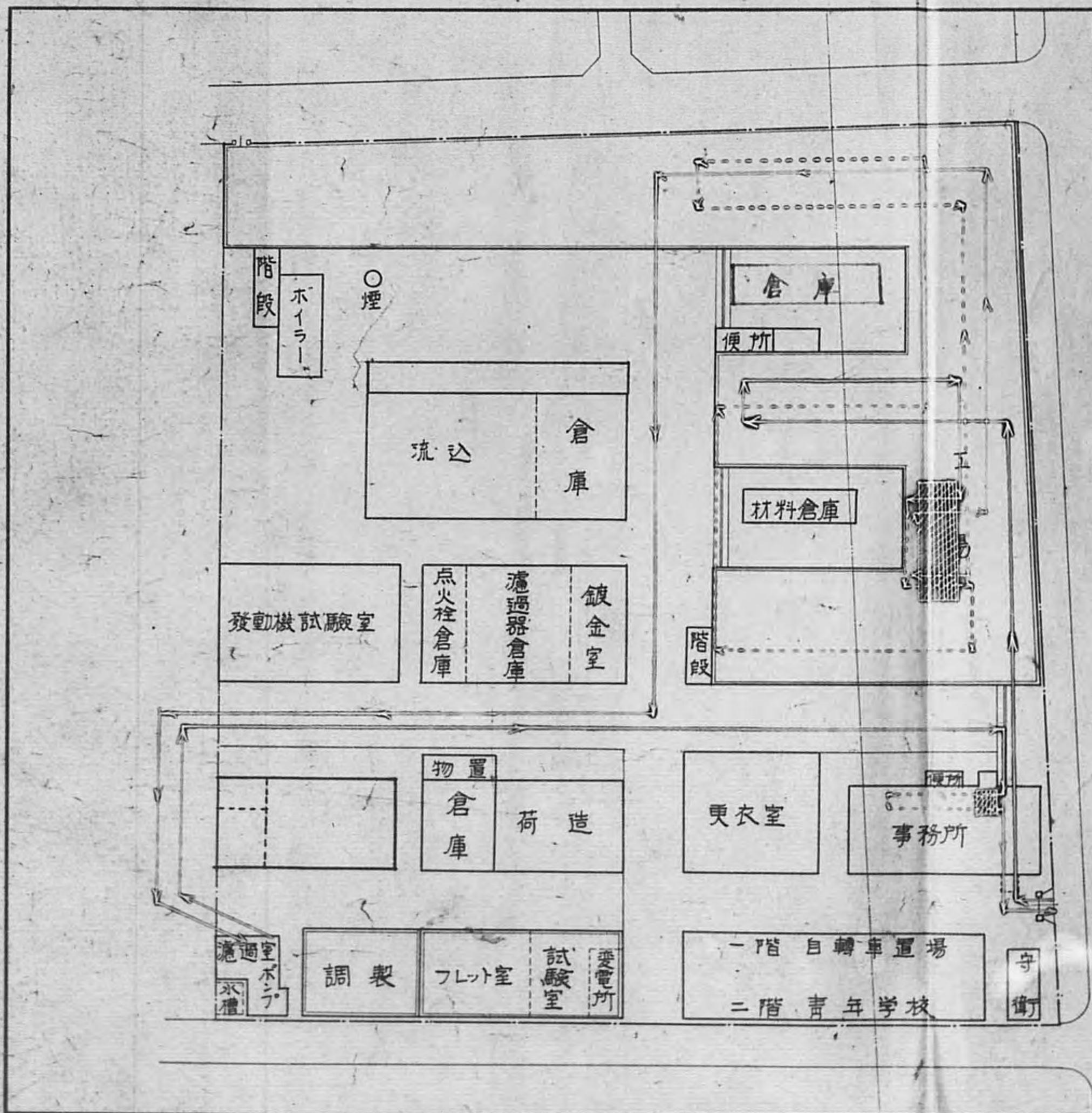
<p>四、案内者若ハ説明者ノ 身分又ハ職業氏名</p>	<p>三、見學セシ工場名</p>	<p>參觀者ノ氏名身分 又ハ職業 (但附添人)</p>	
<p>營業部販賣係 製造第三部 伊藤周次郎</p>	<p>派附圖面通り</p>	<p>廣田新太郎 成田秋治</p> <p>名古屋市産業部觀光課 愛知縣經濟部商工第二課</p>	<p>金榮閣 王學會 週增元 崔致良 吳鳳翔 齊秀春 王殿武</p> <p>錦州黑山實業女學校校長 錦州第二國民高等學校教諭 安東省大孤山國民高等學校校長 安東省鳳城地方師道訓練所教官 奉天省昌圖實業女學校校長 興安南省興安實業女學校教諭 興安北省海拉爾第二國民高等學校教諭</p>

<p>五 立會者ノ身分又ハ 職業氏名</p>	<p>名古屋陸軍造兵廠 監督官陸軍砲兵中尉 丹羽 健一 名古屋築地憲兵分隊憲兵軍曹 青山 重一 名古屋築地憲兵分隊憲兵兵長 森 勇 愛知縣御器所警察署特高課刑事 望月 三郎</p>
<p>六 參觀者ノ著眼及應 答事項</p>	<p>新新ノ機械設備ト、秩序有ル流レ作業ヲ興味ヲ以テ見學シ 弊社製濾過器ニ對シテハ特ニ注目シ應答有リ</p>
<p>七 感 想</p>	<p>見學ヲ通ジ日本統後ノ産業ヲ認識シ以テ日滿支經濟一體ノ 觀念ヲ得タリト思惟ス</p>
<p>八 其ノ他參考事項 (來訪ノ経路及行 先等)</p>	<p>山田ヨリ二日午后九時二十五分來名、三日名古屋城拜觀、 熱田神宮參拜後弊社工場見學後ハ東山動物園見學 同日 午后九時五十九分東上ス</p>

日本特殊陶業株式會社建物配置圖

縮尺 五百分之壹





號九二第

(裁決) 行決 覽 回 後	帶 連		決行指定	局長 委任	決裁指定	三年	保存期限
	長(部)局	長(部)局					
			大臣				受領番號
			委				壹受第四六五三號
			政務次官				滿洲國經濟部對 察旅行團之候 實供與方 件
			參與高官				駐日滿洲國大使館
			局長	鏡 純			起元廳(課名)
			主務官	河村			陸軍
			副官	河村			
			書記官	河村			
			主務員	河村			
			局長	河村			
			主務員	河村			
			大臣受領	昭 和			
			提出	昭 和			
			局長受領	昭 和			
			主務員受領	昭 和			
			日期	年 月 日			
			日期	年 月 日			
			日期	年 月 日			
			日期	年 月 日			

政務官 回付(決行前)

拾年保

(決行後)

審案 筆記者

陸軍

陸軍

軍

十月三十日

九月廿八日

實檢第一七三號

副官より株式会社国部鐵工所社長宛通牒

(陸普)

首題旅行團別紙第一中隊七七名第二中隊七七名二

會社 国部鐵工所 二月(貴社工場見學)許可セラレタルニ

福岡縣糟屋郡席内村大字古賀

二付申添

九三三號

昭和十一年九月卅日

副官より兵器本部長及憲兵司令部本部長

海軍省副官宛通牒

前同文但シ一月より株式会社国部鐵工所

に付承知相成度ニ作ル

陸普第六九三三號

昭和十一年九月卅日

副官より駐日滿洲國大使館參事宛回答

九月二十五日附日大總第六四八號首題ノ件取討

副官より株式会社国部鐵工所社長宛通牒

(陸普)

首題旅行團別紙第一中隊七七名第二中隊七七名ニ
對シ來ル十月七日(貴社工場)見學方許可セラレタルニ
付便宜供與方相煩度
進シ見學範圍ハ第三類ニ付申添フ

陸普第六九三三號

昭和五年九月卅日

副官より兵器本部本憲兵司令部本部長、
海軍省副官宛通牒

前同文但シ一月ヲ「株式会社国部鐵工所」ニ
「同」ヲ「承認相成度」ニ作ル

陸普第六九三三號

昭和五年九月卅日

副官より駐日滿洲國大使館參事官宛回答
九月二十五日附日大總第六四八號首題ノ件取討

置
平夕九二付
御承知相成度

陸普第六九三三號

昭和五年九月卅日

(未)

陸
軍





日大總第六四八號

康德七年九月二十五日

四六五三



駐日滿洲國大使館

參事官 野田清

陸軍省副官 川原直一殿

滿洲國經濟部財務職員訓練所學生日本修學
視察團ニ對スル便宜供與手配方依頼ノ件

拜啓 陳者敝國經濟部財務職員訓練所學生日本修學視察團一行別表
▲中隊七七名 二中隊七七名 同團團長花田博引率ノ下ニ別添名簿及
日程表ニ依リ貴國各地ニ視察見學旅行可致候ニ付諸般ノ便宜供與方
御高配賜度御依頼申上候

尙東京滞在豫定表ハ別紙ノ通りニ御座候

一名簿日程 八部

一東京日程 八部

添附

敬具

駐日滿洲國大使館

滿洲國經濟部財務職員訓練所生日本修畢旅行團
 (一中隊 七七名、二中隊 七七名)

東京豫定日程

旅宿 上野福仙旅館

一〇月二〇日(日)

一中隊 午後五、三二

東京着(安城ヨリ)

二中隊、六三五

二一日(月)

午前 八、三〇

宮城遙拜
 靖國神社
 國防館、遊就館

二二日(火)

明治神宮
 同寶物殿
 海軍畫館
 陸軍省

二三日(水)

午前 九〇〇

海軍省
 外務省
 大藏省

午後 一、三〇
 一〇、三〇
 一〇、三〇

大使館
 國會議事堂
 稅務監督局

二四日(木)

午前 九〇〇

業平專賣局煙草工場
 震災紀念堂

午後 一、〇〇

吾妻橋大日本ビール工場
 上野、科學博物館、動物園
 自由見學

二五日(金)

一中隊 午前八、三〇
 二中隊 一〇、二六

新宿發(上諏訪へ)

二六日(土)

旅行目的

十月七日 岡部鐵工所見學
相二付レ申意承リ被
鏡砲課 中 軍務課

日ノ隆昌發展ヲ齎シタル國民努力ノ跡ヲ研究理解セシム
三、全旅行間努メテ日本朝野ノ人士ニ親灸セシメ以テ友邦國ヲ擧ケテ克ク滿洲國建國ノ精神ヲ理解シ且ツ熱烈ナル同情ヲ持シアル眞相ヲ理解セシム
四、日本ノ租稅制度並ニ專賣制度特ニ我國ノ範トスヘキ各種稅法及關係法規ノ實施狀況ヲ視察研究シ他日ノ實務遂行ニ資セシム

ノ簡拔シ委任官試補トシテ一ケ年ニ亙リ徹底セ
トスルニ當リ親シク友邦日本帝國ノ國體、國民
明シ併セテ將來ノ職務遂行ニ資セシメントス
淵源ヲ明カニシ皇統ノ由來スルトコロ悠遠ニ
ト共ニ明治維新以來僅カニ七十年ノ間ニ於テ今

秋田南條ノ除キ更ニナシ

九月廿八日
鏡砲課 中

鏡砲



田 博

第一中隊 村上 清男 萩野 正三

王 禹 趙 星 三

第二中隊 川口 松太郎 松原 照一

任 文 盛 王 安 尊

旅行目的

本訓練所ハ滿洲國經濟部直轄ノ職員訓練機關ニシテ中等學校卒業以上ノ有爲ナル青年ヲ簡拔シ委任官試補トシテ一ケ年ニ亙リ徹底セ
ル教育訓練ヲ施シ以テ將來模範中堅財務官吏ヲラシムル所トス
當旅行團員ハ其ノ第四期生トシテ本年一月入所セシモノニシテ將ニ卒業ノ期近カラントスルニ當リ親シク友邦日本帝國ノ國體、國民
性ヲ觀察研究シ日滿不可分ノ關係及滿洲國ノ建國精神ヲ體得セシメ以テ教育ノ完成ヲ期シ併セテ將來ノ職務遂行ニ資セシメントス
特ニ重點ヲ左記諸點ニ置ク
一、時恰モ日本紀元二千六百年ニ當リ深甚ノ祝意ヲ表スルト共ニ天壤無窮ノ日本皇室ノ淵源ヲ明カニシ皇統ノ由來スルトコロ悠遠ニ
シテ森嚴ナルヲ認識セシム
二、日本ノ國體、國民性特ニ時局下ニ於ケル其ノ偉大ナル國力ヲ明確ニ認識セシムルト共ニ明治維新以來僅カニ七十年ノ間ニ於テ今
日ノ隆昌發展ヲ齎シタル國民努力ノ跡ヲ研究理解セシム
三、全旅行間努メテ日本朝野ノ人士ニ親灸セシメ以テ友邦國ヲ擧ケテ克ク滿洲國建國ノ精神ヲ理解シ且ツ熱烈ナル同情ヲ持シアル眞
相ヲ理解セシム
四、日本ノ租稅制度並ニ專賣制度特ニ我國ノ範トスヘキ各種稅法及關係法規ノ實施狀況ヲ觀察研究シ他日ノ實務遂行ニ資セシム

指導職員

旅行團長

花田 博

第一中隊

村上 滿男

荻野 正三

王 禹

趙 星 三

第二中隊

川口 松太郎

松原 照 一

任 文 盛

王 安 尊

旅行團編成表

第一中隊 (七十七名)
中隊長 張朝棟

第二中隊 (七十七名)
中隊長 徐鳳岐

學生總隊長 徐德有

第一區隊長 (四〇名)
陳文科

第二區隊長 (三七名)
姚鴻鈞

第三區隊長 (四〇名)
張家驪

第四區隊長 (三七名)
劉宗儒

第一班 (二〇名)
班長 初興文

第五班 (二〇名)
班長 于盛謙

第九班 (二〇名)
班長 滕世權

第一三班 (二〇名)
班長 吳文選

施長興 文一八
高德義 二二三
齊佩忱 二二〇
楊香齡 二二〇
李春興 二二〇
劉中民 二〇〇
陳金輝 一九〇
劉敬寬 一九九
劉廷選 一九九

傅藍田 二一九
胡延久 二二三
王保泰 二二二
劉永春 二二一
張東旭 二二〇
張朝棟 一九九
張正德 一九八
馬榮厚 一九八

王富貴 二二三
張乃中 二二三
趙玉庚 二二〇
劉成俊 二〇〇
董家成 二〇〇
王義成 一九九
張家驪 一九八
劉延鼎 一九八

赫貴震 二一八
高啓瑞 二一五
朱奉先 二二〇
王長宏 二二〇
劉宗儒 二二〇
尤鈞寶 二二〇
吳桂昌 二二〇
王尙仁 二〇〇
何世昌 一九九

第二班 (二〇名)
班長 李連春

第六班 (九名)
班長 劉存義

第一〇班 (二〇名)
班長 程景利

第一四班 (九名)
班長 趙成環

吳連春 二二〇
周起澄 二二三
高連英 二二二
趙鳳池 二二二
姜有章 二二〇
張家相 二二〇
王家相 二二〇
余政平 二二〇
崔仲賢 一九九

周振興 二二〇
陳樹田 二二三
葛志毅 二二二
蕭相卿 二二〇
王玉琨 一九九
崔國強 一九八
姚鴻鈞 一九八

程景利 二二〇
劉澤錚 二二二
劉忠恕 二二二
李振歐 二二二
李碩明 二二二
蕭雲浦 一九九
朱春生 一九九
吳玉璞 一九八
陶新然 一九七

劉萬達 二二四
劉香閣 二二三
劉啓賢 二二二
張殿書 二二二
董成書 二二〇
董金齡 二二〇
王經如 一九九

第三班 (二〇名)
班長 殷鳳儀

第七班 (九名)
班長 徐國光

第一一班 (二〇名)
班長 劉德昌

第一五班 (九名)
班長 于天武

張朝儀 二一九
李樹恩 二二二
李嶽山 二二〇
張乃翰 二二〇
李元翰 二〇〇
陳文元 一九九
孫文田 一九九
劉生恩 一九九
楊春庭 一九九

徐國光 二二二
周治齡 二二五
宋之翰 二二二
杜鴻生 二二〇
沈中玉 一九九
董耀宗 一九九
楊書宗 一九九
張鳳岐 一九八

劉德昌 二二〇
尹景甫 二二三
王景珍 二二三
鄭慶周 二二二
徐鳳岐 二二〇
趙素宜 二〇〇
許天合 一九九
吳啓賢 一九九
趙廷臣 一九九

于天武 二一九
姚金瑛 二二三
王承瑛 二二三
許承瑛 二二三
秦海順 二二〇
王安山 一九九
王立堂 一九八
周紹儒 一九八

第四班 (二〇名)
班長 郝仁豐

第八班 (九名)
班長 董家驪

第一二班 (二〇名)
班長 董連任

第一六班 (九名)
班長 白振亞

林和仁 二二二
于紹龍 二二二
于貴清 二二二
孫建業 二二二

董家驪 二一九
趙連昌 二二〇
王錫斌 二二〇
劉玉麟 二〇〇

董連任 二一八
馬振魁 二二三
于慎魁 二二三
李仲春 二二二

白振亞 二二三
王春焯 二二三
畢長金 二二三
董振華 二二三

第二班(一〇名)
班長 李連春
吳連澄
周起治
高連英
趙鳳池
姜有章
張家路
王相
余政平
崔仲賢

第六班(九名)
班長 劉存義
周振興
陳樹田
葛志毅
蕭相卿
王啓和
崔國強
姚鴻鈞

第一〇班(一〇名)
班長 程景利
譚乾錦
劉澤生
姜忠恕
李振歐
李碩朋
蕭春甫
朱春生
吳玉璞
陶新然

第一四班(九名)
班長 趙成環
劉萬達
劉香英
劉啓閣
張賢開
喻成賢
董成書
曹金齡
王經如

第三班(一〇名)
班長 殷鳳儀
張朝恩
李樹滋
平嶽山
張乃翰
李文元
陳文翰
孫文田
劉生思
楊春庭

第七班(九名)
班長 徐國光
楊治齡
周治國
宋之翰
杜鴻生
沈中玉
董耀宗
楊書聖
張鳳岐

第一二班(一〇名)
班長 劉德昌
尹文甫
王對珍
鄭慶周
徐鳳岐
趙素宜
趙天合
許啓賢
吳廷賢
趙德臣

第一五班(九名)
班長 于天武
姚廣武
王承瑛
紀承瑛
許承瑛
秦寶階
安海順
王安山
王立國
周紹儒

第四班(一〇名)
班長 郝殿璽
林和仁
于紹鯤
于貴清
孫建業
王省業
朱維新
徐德有
王維斌
鍾士堯

第八班(九名)
班長 董蔭秦
趙家驥
董錫昌
王錫斌
劉玉麟
徐維勤
周志謙
劉萃衡
蘇煥宸

第一六班(九名)
班長 白振亞
畢春燎
褚長庶
董振金
李兆興
李兆華
李兆華
李兆華
李兆華
孫富卿

第一三班(一〇名)
班長 趙連任
馬玉魁
于振魁
李慎餘
蘇仲春
張宗賢
王安之
程景明
陳寶琦
佟樹元

第一七班(九名)
班長 董蔭秦
趙家驥
董錫昌
王錫斌
劉玉麟
徐維勤
周志謙
劉萃衡
蘇煥宸

通信連絡係
胡延久
李兆興
李國強
楊書國
楊真聖
高真保
劉廷選

記錄係
孫生田
王保泰
王長宏
張鳳岐
陳金鐸

趙振家
趙振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家

衛生係
陳寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦

胡延久
李兆興
李國強
楊書國
楊真聖
高真保
劉廷選

孫生田
王保泰
王長宏
張鳳岐
陳金鐸

趙振家
趙振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家
李振家

衛生係
陳寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦
張寶琦

(〇印八係長)

康德七年十月

第一部第四期生日本視察旅行團名簿及日程表

滿洲帝國經濟部

財務職員訓練所

昭和十二年十月二十日加爾各答

第一部第四期生日本視察旅行日程

次日	月日	曜日	第一隊	第二隊	列車	視察個所	視察要項	宿泊
1	三月十日	木	新奉天	新奉天	6 34 44 24	車行		中車
2	四日	金	安東省	安東省		車行		京一城泊
3	五日	土	京城	京城	104 304	朝鮮神宮 昌慶宮 昌慶苑	朝鮮施政一般及滿鮮關係之研究	京一城泊
4	六日	日	下關	下關	6	車行	車中南部朝鮮一般事情研究	下關一泊
5	七日	月	博多	博多	39 43	古賀 (岡部鐵工所)見學	車中北部九州一帶ノ工業狀況研究 模範工場見學	博多一泊
6	八日	火	下關	下關	22 116	九州帝國大見學、西公園	北九州商工業一般視察 車中山陽地方一般事情研究	下關一泊
7	九日	水	京都	京都		御所拜觀、法山街陵參拜、名所舊跡見學	國體歷史ノ研究	京四都泊
8	十日	木	京都	京都		稅務署、西陣織檢査所 染色試驗所 伏見酒造工場	稅務ニ關スル研究 絹織物並酒造ニ關スル研究	京四都泊
9	十一日	金	京都	京都		極原神宮參拜	歷史國體ノ研究	京四都泊
10	十二日	土	京都	京都		午前中 奈良古跡見學	歷史研究	京四都泊
11	十三日	日	京都	京都		神宮參拜 徵古館 農事見學	歷史及日本國體ノ根本ヲ研究	京四都泊
12	十四日	月	山田	山田	209 104 211 106	午前中 山田古跡見學	歷史研究	山田二泊
13	十五日	火	山田	山田		午前中 山田古跡見學	歷史研究	山田二泊
14	十六日	水	山田	山田	216 218	午前中 山田古跡見學	歷史研究	山田二泊
15	十七日	木	名古屋	名古屋		熱田神宮參拜、稅務署 稅務司、名古屋見學 部助司、名古屋見學	稅務ニ關スル研究 神宮參拜ニ付宮城通拜	名古屋三泊
16	十八日	金	名古屋	名古屋		下木處地場、動物園、窯業工場	工業並ニ衛生施設ニ關スル研究	名古屋三泊
17	十九日	土	名古屋	名古屋	706 734	小學校、青年學校、模範農家、產業組合	農業ニ關スル教育實地及農村ノ實態ヲ調査研究	名古屋三泊
18	二十日	日	安東	安東	706 26	車行	車中東海道沿線一帶研究	安東一城泊
19	二十一日	月	東京	東京		皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社	日本精神ニ關スル研究	東京一城泊
20	二十二日	火	東京	東京		皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社	日本精神ニ關スル研究	東京一城泊
21	二十三日	水	東京	東京		皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社	日本精神ニ關スル研究	東京一城泊
22	二十四日	木	東京	東京		皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社	日本精神ニ關スル研究	東京一城泊
23	二十五日	金	東京	東京		皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社、皇宮參拜、靖國神社	日本精神ニ關スル研究	東京一城泊

上原油旅



No.

陸軍省副官殿

謹啓

一、滿洲國人見學御許可の件

陳者今般 陸普第六九三三號 を以て左記一行の弊工場見學御許可の御通知に預り正に敬承仕り候就而一行の視察目的の幾分也とも副ふ陳萬々手配可仕候

記

滿洲國財務職員訓練所學生 徐 德 有 外一五四名

期日 十月七日

敬 具

手紙三



福岡市外古賀驛前

電話(國一八番(庶務、所長用)古賀(三六番(用度會計、設計用)番替 福岡 五六二四番)

10.2

13 閱

書 四三五三 二



兵器本部經由

小倉陸軍造兵廠經由

滿洲國當工場參觀實施狀況ノ件報告

昭和十五年十月十日

株式會社 岡部鐵工所

代表社員 岡部 繁

陸軍大臣 東條英機 殿

昭和十五年九月三十日附陸普第六九三三號ヲ以テ御許可相受ケ候首題ノ件左記ノ通り實施セシメ候條此段及御報告候也

左記

工場監督 官認印	會社(又ハ工場) 代表者認印
-------------	-------------------

陸軍	昭和十五年十月二十六日
兵器本部	經由第 八〇 號



<p>一、參觀日時</p>	<p>昭和十五年十月七日 自午前十一時二十分 至午后五時四十五分</p>
<p>二、參觀者ノ國籍 身分又ハ職業氏名</p>	<p>滿洲國財務職員訓練所學生 徐德有 外一四八名 團長 花山博 指導職員 村上滿男 外七名 計 一五七名</p>
<p>三、見學セシ工場名</p>	<p>倉庫、検査場、機械工場ノ一部、鑄物工場、 構内神社參拜、寄宿舍</p>
<p>四、案内者若ハ說明者ノ身分又ハ職業氏名</p>	<p>當社社長 岡部 繁 奈良崎昂三郎 從業員 服部 弘 文 大川内一博 末永壯市 石藏研定</p>
<p>五、立會者ノ身分又ハ職業氏名</p>	<p>小倉陸軍造兵廠監督課 大石 少尉</p>

六 參觀者ノ着眼
及應答事項

當社ノ精神教育

皇道ニ立脚セル工場管理

談話應答ノ主ナル點

一、教育ノ根本ハ如何

親孝行ニ在リ併テ忠孝一致ヲ説ク

二、勞動時間ト体力ノ關係

精神ノ緊張如何ニアリ

三、斯ク眞剣ナル經營ハ何ニ依ルカ

眞ノ日本ノ姿ニヨル經營ナリ

七 感想

東洋精神ノ現實ナル發露ト日本婦人勞動狀況
ニ感激アリ

八 其他參考事項

門司經由午前一一時二分 古賀驛着
午後六時三分古賀驛發 福岡市ニ向フ

號 三 第

保存期限 三年
 決裁指定
 執行指定

政務次官 回付
 決裁 後
 課名

受領番號 壹第 五〇六二號
 起元廳(課名) 東京市
 件名 紀元二千六百年東京市奉祝會市民體育大會招待
 競技相撲選手派遣件

決行(決裁)後
 回覽課名

大臣 委	次官	高級 副官	主務副官	審案 筆者
主務代 局長	參與官	主務 課長	主務課員	
事務 局長	書記官	主務 課長	官房御用掛	
局長		局長		
局長		局長		

大臣房	主務局長	事務局長	受領番號
了結	領受	提出	兵務部第四十八號
昭和 年 月 日	昭和 年 月 日	昭和 年 月 日	

決行(決裁)後 回覽	連帶
局長	局長
局長	局長

左 頁

陸普 副官ヨリ東京市長宛回答案

十月十五日附市民發第ニ八四〇號ニ依ル首題申
請ノ件ハ秋季演習中ニ付派遣致シ難キニ付承
知相成度依命回答ス

陸普第七五四〇號

昭和五年十月二十六日



一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ余キ入完丙死者ニ限ル)

市民發第三八四〇號

昭和十五年十月十五日



東京市長 大久保留次郎

陸軍大臣官房副官部 殿

紀元二千六百年東京市奉祝會市民體育大會
招待競技相撲選手派遣方ノ件申請

紀元二千六百年ノ聖歲ニ當リ實詐ノ無窮ヲ慶祝シ奉ル爲メ本市ニ於テハ別紙要項ニ依リ市民ノ各層ヲ動員シ嚴肅且盛大ナル奉祝市民體育大會ヲ施行致シ候處本大會ノ意議ヲ更ニ深カラシムル爲メ市民ノ畏敬ト感謝ノ的タル陸海軍ノ特別御參加ヲ仰ギ兩軍對抗相撲試合ヲ舉行致シ度候ニ就テハ右趣旨御了承ノ上選手三〇名御派遣方御高配賜り度及申請候也

別紙要項
當課保管
十月二十日
兵務課

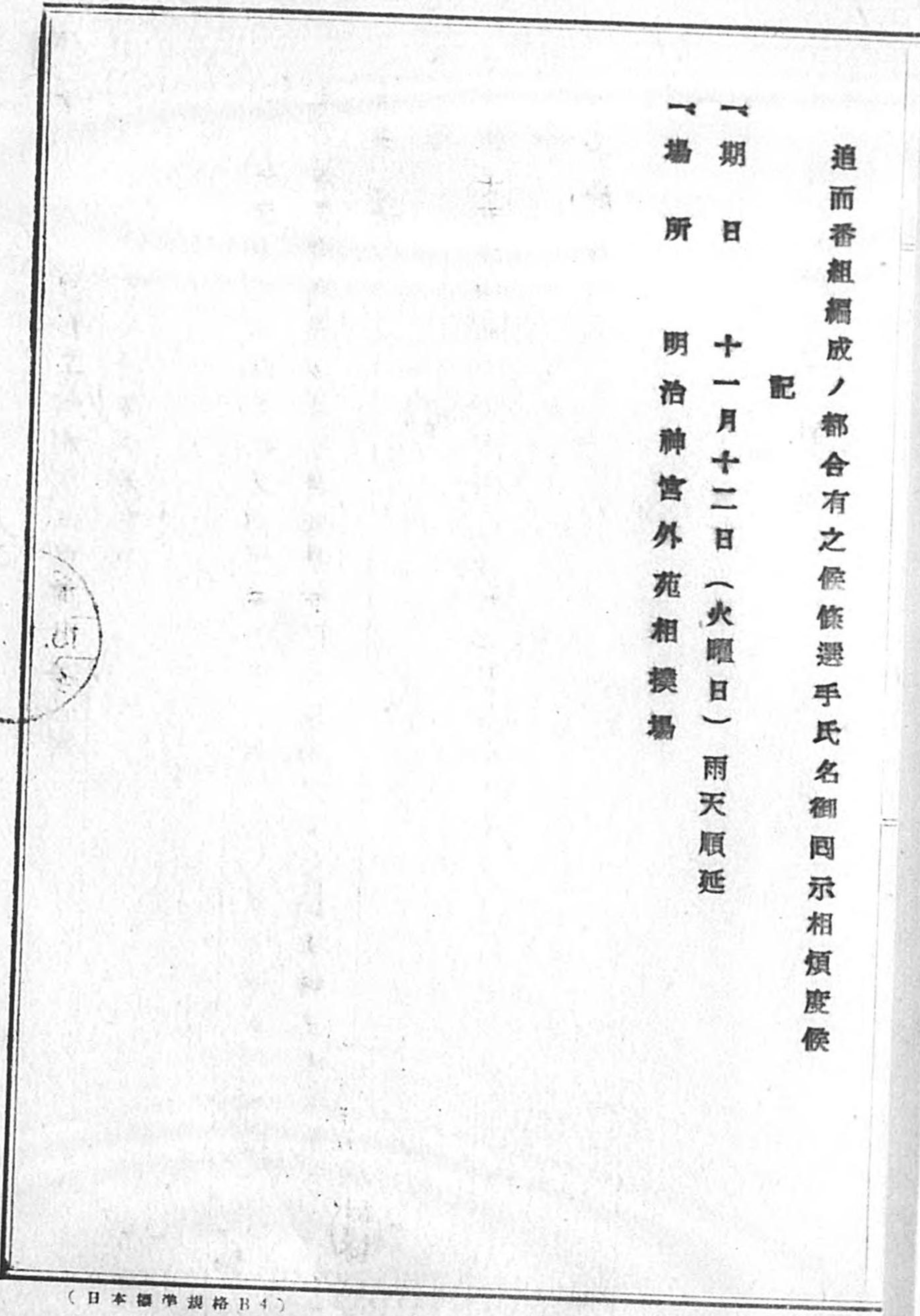


東京市

追而番組編成ノ都合有之候條選手氏名御同示相煩度候

記

一 期 日 十一月十二日（火曜日）雨天順延
一 場 所 明治神宮外苑相撲場



① 本場ニ添綴スヘキ書牒
② 本場ニ添綴スヘキ書牒
③ 本場ニ添綴スヘキ書牒
④ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑤ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑥ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑦ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑧ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑨ 本場ニ添綴スヘキ書牒
⑩ 本場ニ添綴スヘキ書牒

第一三第

(裁決)行決 覽回後	連帶		局長 委任	決行 指定	決裁 指定	三年	保存 期限
	局長(部)局	局長(部)局					受領 番號
			大臣 委			展覽會資料貸與ノ件	番第 五 一 七 五 号
			政務次官 委				
			參與官 高 級 副 官			起元廳(課名)	群馬縣立伊勢崎工業學校
			主務 副官				
			情報部			審案 筆記者 宮崎 陸 軍	昭和拾五年拾月廿六日
			主務課長				
			主務課員			經被甲第 八 四 號	
			大臣官房			昭 和 十 五 年 十 月 廿 六 日	
			受領了結			昭 和 十 五 年 十 月 廿 六 日	

政務官
書記官
回付(決行前)

決行後

(決行後)

審案
筆記者
宮崎 陸 軍

昭和拾五年拾月廿六日

1. 本紙ニ添附スヘキ書類
1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ余キ入院死者ニ限ル)

副官ヨリ 群馬縣立伊勢崎工業學校長 越智 求馬 へ通牒

(陸 普)

十月十九日附陸軍大臣宛申請ニ係ル首題ノ件別紙ノ通陸軍被服本廠ヨリ貸與スルコトニ定メラレタルニ付承知相成度

陸普第七五六一號

昭和五年十月二十八日

副官ヨリ陸軍被服本廠長へ通牒

群馬縣立伊勢崎工業學校主催ノ展覽會ヲ同校ニ於テ開催ニ方リ別紙ノ通貴廠保管品ヲ貸與スルコトニ定メラレタルニ付依命通牒ス

陸普第七五六一號

昭和五年十月二十八日

群馬縣立伊勢崎工業學校
 校長 越智 求馬
 陸軍被服本廠 (本人及テ事務ノ品ヲテハテハテハニ別ル)

本館ニ送附スヘキ書牒

所要經費並貸與品附管、實、對貸與者、負辦、

謝表

劫毒毒眼 (市另用)

施空毒眼 (藥一蘇)

非業用劫毒毒眼

酒寒用劫毒毒眼

劫毒毒眼

品目

員燻

貸與期間

各一辦

至十一月十五日
自昭和十五年十一月三日

對貸與者 母機袖工業學姊身

貸與附屬 齒軍毒眼本瀾

毒眼貸與品目員燻表

一、眼珠

製

查

第四七一號

五反五

昭和十五年十月十九日

群馬縣立伊勢崎工業學校長 越 齋 求 馬



陸軍大臣東條英機殿

被服貸與相成度件申請

來ル十一月八、九、十、三日間本校創立滿三十周年記念展覽會ヲ開催スルニ當リ國防上重要ナル被服左記ノ通り陸軍被服本廠ヨリ貸與相成度候間御許可相成度此段及申請候也



洋行系五十九号

追而貸與品保管ノ責並輸送等ニ要スル費用ハ主權

者ニ於テ負擔致ス可ク申添候

尤記

- 一 防寒被服(酷寒用)
- 一 作業用防寒被服
- 一 防寒被服
- 一 航空被服(第(五)種)
- 一 防毒被服(市民用)

各売揃



群馬縣立伊勢崎工業學校長 越智求馬

群馬縣伊勢崎町
電話二一六番

昭和十五年十月十九日

東京市麹町区
陸軍省御中

1250

第三二號

保存期限 三年
 決裁指定 副長
 決行指定

政務次官回付 決裁前後連帶
 課名

封鎖

受領番號
 件名
 起元應(課名) 北海通廳
 紀元二千六百年式典參列者名簿ニ關スル件

大臣

政務次官

參與官

書記官

審案
 筆記者

次官

高級副官

主務副官
 官房御用掛

主務
 副長

主務
 副長

主務
 副官

主務局
 受領
 昭和三十五年
 拾月廿八日

兵備第二二七號

連帶
 局長

長課

大臣官房
 受領
 昭和三十五年
 十月三十日

決行後
 覽回
 局長

長課

陸軍

官

第三部長より北海道廳官宛電報案

祝接三電第 那

北海道に在任

紀元二千六百年式典参列者無之ニ付承知相成

度

上野

祝接三電第三七號

649

昭和拾五年拾月廿八日



第三部長ヨリ北海道廳官宛書翰

祝賀三遷第 那

北海道に在住

紀元二千六百年式典参列者無之ニ付承知相氏

度

上野

祝賀三遷第三七號

649

昭和拾五年拾月廿八日



陸軍 第五三一



電報譯

十月十六日 午前午後

時時

分分
著發

人事局長

宛

發信者 北海道廳長官

第 號

貴省選定、本道在住・二六〇〇年式典参列者
名簿送付セラレタルヤ、資格別人員迄電乞ノ

貴課ニ於テ處理相成度
無備(深而)

陸軍電信著信紙

注意

受付當日受信セシモノハ月日ヲ記入セス
 受付時刻ノ表示中「セ」トアルハ午前「コ」トアルハ午後ヲ示ス

文	本	定指	受信氏名	局發	局著
<p>ソウフセラレタルヤシカクベ ツジ ニンインヘンデンコフ ホクカイトウテフテフカン</p>	<p>キセウセンテイノホン ドウザ イジ ウニ六〇〇ネンシキ テンサンレツシヤメイ ホ</p>	<p>リク グ ン セウ レ ジ ン ジ キ ヨク テ ウ</p>	<p>官 ハ 一 字 サ ツ ホ ロ テ イ シ ン 七 ハ コ オ 時 五 分</p>	<p>三 三</p>	<p>通過番號 受信時分 午後 2 時 2 分 技手 カ</p>
			事記		

陸軍省



著信手號

第三三三號

保存期限 十年
 決裁指定 局長
 決行指定

拾三保

決行

大臣 委		局長 主務		政務 次官		件名 要塞地帶内公有水面埋立承認延期ニ関スル件	番號 壹第五〇四五號	受領 號領
次官		高級 副官		參與官				
局長		主務 課長		書記官		起元廳(課)名 臺灣總督府交通局	決裁前連帶 課名	決行(決裁)後 課名
局長		主務 課員		主務 副官 官房御用掛				
防衛甲第四六七號		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		
防衛甲第四六七號		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		
昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		
昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		昭和三十五年十月十五日		

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

昭和三十五年十月十五日

陸普

副官ヨリ出願人へ通牒(基隆要塞司令部在)
八月三十一日附交通部第一六六四號申請、通承認セラレタルニ
付依命通牒ス

陸普第七五六八號

昭和五年十月廿八日



陸普

基要地第一四二號

要塞地帯内水面埋立承認延期ニ関スル件

昭和拾五年拾月八日

基要地帯要塞司令官山縣栗花生

陸軍大臣東條英機殿

首題ノ件ニ関シ臺灣總督府交通局長
泊武治ヨリ別紙通り願出有之候ニ付及送付候也
追テ本件ハ承認延期可然、モ卜認ム

陸軍



五〇四五

昭和十五年八月三十一日

臺灣總督府交通局總長 泊

武

陸軍大臣 東 條 英 機 殿

交道第一六六四號

要塞地帶内水面埋立承認ニ關スル件

基隆要塞司令部

日附陸普第二九六四號ヲ以テ御承認ノ基隆市社寮

町地先水面埋立工事ニ對シ昭和十五年三月二十三日附陸普第一八八一號ヲ以テ竣功期限延期承認相成候處右ハ當局工事施行上ノ都合ニ依リ竣功期限ヲ更ニ昭和十九年三月三十一日迄延期方御承認相成度此段及申請候也



臺灣總督府交通局道路港灣課

昭和十五年八月三十一日

臺灣總督府交通局總長 泊

武

陸軍大臣 東 條 英 機 殿

交道第一六六四號

要塞地帯内水面埋立承認ニ關スル件

昭和十四年五月十二日附陸普第二九六四號ヲ以テ御承認ノ基隆市社寮町地先水面埋立工事ニ對シ昭和十五年三月二十三日附陸普第一八八一號ヲ以テ竣功期限延期承認相成候處右ハ當局工事施行上ノ都合ニ依リ竣功期限ヲ更ニ昭和十九年三月三十一日迄延期方御承認相成度此段及申請候也

臺灣總督府交通局道路港灣課

五〇四五



一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ余キ入完丙花皆ニ限レ)

延期理由

本件埋立ニ使用スル土砂ハ全部社寮町二五八國有地山林内ヨリ採取豫定ナリシガ當初ノ豫定區域ガ軍部ノ都合ニ依リ縮少セラレタル結果所要土量ノ不足ヲ來シ之ヲ他ニ求ムルノ外無キコト、ナリタルモ其採取地ハ距離遠隔トナリ運搬方法亦困難ニシテ工事進捗容易ナラサルヲ以テ其竣功期限ヲ三ヶ年間延期セントスルモノナリ

注意

(本審案用紙ハ三年以内供保)

入院

陸軍

保存期限

三年

決裁指定

富長在

決行指定

訓

第 一 號

政務次官
參與官回付
決裁前後
連帶
課名

決行(決裁)後
回覽課名

受領
番號

老方四吾の平

起元廳(課)名

新愛知新聞社

件名

機械化國防展覽會兵器貸與ノ件

大臣
委

委

政務
次官

次官

主務
局長

參與官

高級
副官

主務
課長

書記官

主務副官
官房御用掛

主務課員

審案
筆者

大臣官房

主務局長

了結
領受

提出
領受

昭和
年

昭和
年

十月一日

六月十六日

決行後
回覽

連帶

局長

局長

長課

長課

機械化
情報

訓

訓

訓

訓

訓

訓

陸普 副官ヨリ新愛知新聞社社長へ通牒
九月十七日附願出ニ係ル旨題ノ件別紙ノ通
貸與方許可セラレシニ付承認相成度候
追テ所要経費並に貸與名器保管ノ責ハ貴方
ノ負擔ニ付申添リ

陸普第六四九一號

昭和五年九月十六日

陸普 副官ヨリ兵器本部総務部長へ通牒

旨題ノ件ニ関シ新愛知新聞社ヨリ願出有
之別紙ノ通貸與方許可セラレシニ付可成取討
相成度

追テ所要経費並に貸與名器保管ノ責ハ出願
者ノ負擔ニ付申添リ

陸普第六四九一號

昭和五年九月十六日

陸普

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死歿者ヲ除キ病死者ニ限ル)
3. 貸與品目録

陸軍省本部
新愛知
陸軍

官定控

別紙

機械化國防展覽會貸與品目録表

品目	負数	摘要
對戰車砲	一	
八九式中戰車	一	

- 一、會場 靜岡市松坂屋百貨店
- 二、主催 新愛知新聞社
- 三、會期 自九月二十三日至九月三十日
- 四、貸與期間 自九月二十日至十月三日

受領書 第一四九〇



機械化國防展覽會出品願

昭和十五年九月十三日

名古屋西區御幸本町二丁目

愛知新聞社
大島 吉



陸軍大臣 東條英機閣下

目下静岡縣下に於て行はれつゝある戦車献納運動に呼應し
本社並びに機械化國防協會主催のもとに九月廿三日より三
十日まで静岡市松坂屋百貨店に於て機械化國防展覽會を開
催致すことに相成候については東京陸軍兵器補給廠より左
の兵器御出品下され度く此段御願申上候

なほ出品物に對する荷造り運搬費並に出品中毀損に對する修理辨償代は事情の如何に不抱一切主催者側に於て負擔するものとし御當局の出品物件貸與内規の條項遵守可致茲に誓約仕り候

然して出品方御承諾の場合は九月二十一日迄に静岡市松坂屋百貨店宛に御送附相成度爲念御書添申上候

御出品物

一 對戰車砲 一門

一、本紙ニ添附スヘキ書類

- 1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
- 2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

注意

(本審案用紙ハ三年以内保存ノモノニ使用スルモノトス)

陸軍

三年
決裁指定
(高長委任)
決行指定

大臣 房官臣大	主務局長 課局務主	大臣 委	受領 番號	件名
了結 昭和 年 月 日	領受 昭和 年 月 日	提領 昭和 年 月 日	號領 壹 第 四 五 〇 〇 号 第 一	<p style="font-size: 1.2em;">機械化國防展覽會各器貸與期間延期ノ件</p>
(裁決)行決 覽回後	帶連	局長 主務 局長	次官 政務 次官	
局長	局長	次官 委	參與官	<p>起元廳(課)名 新愛知新聞社</p>
長課	長課	課長 主務 局長	書記官	
	機 械 報	主務副官 官房御用掛 主務副官	審案 筆記者	

陸普副官ヨリ新愛知新聞社社長へ通牒 平文

九月廿五日附願出ニ係ル兵器貸與期間延期

ノ件許可セラル

陸普第六九二一號

昭和五年九月二十八日

陸普副官ヨリ兵器本部総務部長へ通牒

九月十六日附陸普第六九一號ヲ以テ新愛知

新聞社へ貸與中ノ兵器ハ十月五日迄期間延

期方許可セラルニ付承認相成度

陸普第六九二一號

昭和五年九月廿八日



陸普副官ヨリ兵器本部総務部長へ通牒
陸普第六九一號
九月十六日附陸普第六九一號ヲ以テ新愛知新聞社へ貸與中ノ兵器ハ十月五日迄期間延期方許可セラルニ付承認相成度

本通牒ニ添付スヘキ書類

機械化國防展御出品兵器貸與延期願

昭和十五年九月二十五日

名古屋市西區御幸本町通二ノ二四

新愛知新聞社々長

大島 宇

吉

陸軍大臣
東條英樹閣下



本社並に機械化國防協會共催のもとに目下静岡縣下全般に
わたり行はれつゝある戦車献納運動に呼應して機械化國防
思想の普及の目的を以て九月二十三日より三十日迄静岡市
松坂屋に開催中の機械化國防展に對し過般御出品被下候兵
器、同展覽會會期を静岡聯隊區司令部、静岡縣及び静岡市
當局よりの御勸告により來る十月五日迄延期致す事と相成

候に就ては目下出品中の左記兵器貨 與延期方御許可相成度
此段及御願候

左記

一 對戰車砲 一門

一 八九式中戰車 一台

十月一日

第二號

軍務局
馬政課

拾年俣

第二號

軍役廢馬特別拂下願

軍務局
昭和十五年九月二十四日
午前
大臣

陸軍省
15.9.24
94
馬政課

自合儀

明治四十年以來內務大臣、御許可費、細菌學的
治療藥品製造、造車、改車、山、及、事、者、以、來
之、し、要、及、馬、匹、之、補、給、途、途、需、要、增加、從
上、極、于、困難、狀、態、之、中、御、下、渡、下、文、出、給、
御、下、渡、文、以、于、軍、役、廢、馬、御、下、渡、文、出、給、
嘆、息、仕、事、也

昭和十五年九月五日

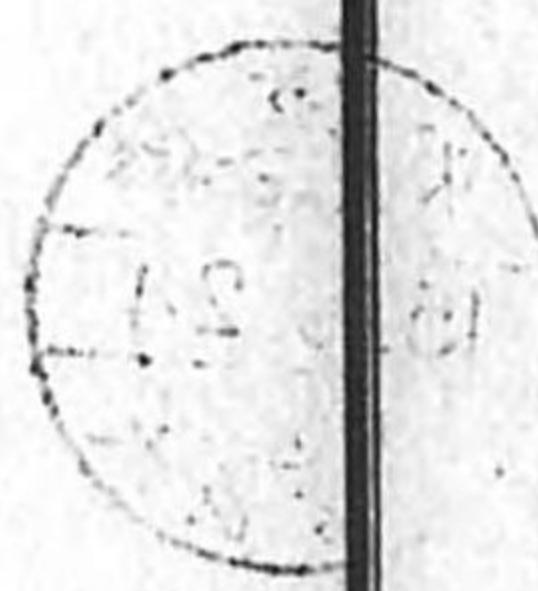
大阪市北区高森町119

大阪細菌研究所長

吉津

度

陸軍大臣 東條英機殿



本業印

陳情書

別我願書提出美通、自分明治甲午以來細菌學的治療藥品、分テリ、血清外七十餘種、製造許可ヲ得テ今日之及ビ又又事變以來馬匹、欠乏ニ毛不物需要切ニ増加シタルニ供給ノ途ナク困難ニ危矣、況テ現在之等、藥品製造ノ官立傳染病研究所、外弊所ヲ併セ四ヶ所ニシテ公立ノ者ハ軍ニ於テ適者、御拂下有之趣、何事也、又弊所ハ私立ニテ得共省令発布最初、許可ヲ得タル唯一製造所ニ有之、今日迄軍ニ於テ毛鷹ニ細品息命ヲ盡シ、我々治勇特ニ藥品ノ性

質上利益地位ノモ、之無之價格之明証四年御規定次
来ノ極多ノ廉價ノモ、之否否何年事情滞滞案ノ上
一二類宛ニモ宜受特別滞滞議ヲ以テ御拂下渡
年及此段陳情仕矣也

昭和十五年九月五日

吉津

度

陸普

副官ヨリ出願人へ通牒（永興灣要港司令部）
經由

九月十九日附出願官題ノ件許可セラレタルニ付軍機保護法施行
規則第十八條ニ依リ許可證ヲ交付ス

和十五年九月二十一日

於於を口附出願人相付

坪里十一番地
又坪由槽所

一行

爲

船舶（ソラ號）出入

一、場所（區域）

朝鮮咸鏡南道德源郡北城面文坪里

一、本證有效
期 間

自昭和十五年九月二十三日
至昭和十五年九月二十七日

一、條 件

1、永興灣外麗島沖ニ停船同地ヨリ邦人ハイロッ
トヲ附スヘシ

2、必要ニ應ヒ陸軍官憲ヲシテ乗船セシメ船内ノ

檢索、容疑物件、封印ヲ爲サシムルコトアリ

日本海軍省

月 報 第一〇六二號次官通牒參照ノコト

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通（本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル）
2. 病 歴 書（流行病基因死歿者ヲ除キ入院病死者ニ限ル）

陸普

副官ヨリ出願人へ通牒

(永興港要塞司令部) 全由

九月十九日附出願首題ノ件許可セラレタルニ付軍機保護法施行

規則第十八條ニ依リ許可證ヲ交付ス

陸普第六八二六號

昭和五年九月二十一日

許可證

260号

朝鮮咸鏡南道德源郡北城面文坪里十一番地
ラードンサン石油株式会社文坪油槽所
セー・レ・ハンコック

行 爲

石油及揮發油荷揚、爲、船舶(ソラ)出入
朝鮮咸鏡南道德源郡北城面文坪里

一、場所(區域)

自昭和十五年九月二十三日
至昭和十五年九月二十七日
永興港外麗島沖ニ停船同地ヨリ邦人パイロット

一、本證有効期間

トヲ附スヘシ

2. 必要ニ應テ陸軍官憲ヲシテ乗船セシメ船内ノ

檢索、容疑物件、封印ヲ爲サシムルコトアリ

日本海軍省

月 報 第一〇六二號次官通牒參照ノコト

一、本紙ニ添附スヘキ書類

- 1. 戶籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
- 2. 病歴書 (流行病基因死歿者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

保存期限 三年 決裁指定 局長 決行指定

大房官臣大		主務局課			大臣 委			件 名	番 受 號 領	政務次官 同付 決裁前連帶 參與官	政務 次官	局長 主務 局長 主務		高級 副官	參與官	決行(決裁)後 回覽課名	陸 軍
了結	領受	出提	領受	號番	次官							外國船舶開港出入ニ関スル件	壹第四三六八號其二 起元應(課)名 ライ社文坪油槽所				
昭和 年	昭和 年	昭和 年	昭和十五年 九月二十四日	防衛甲第四四〇號	次官							局長	局長	高級 副官	參與官		
(裁決)行決 覽回後		帶 連			大臣 委							局長	局長	主務副官 主務課員	書記官		
長 局		長 局			大臣 委							局長	局長	主務副官 主務課員	書記官		
長 課		長 課			大臣 委							局長	局長	主務副官 主務課員	書記官		

監印

一、本簿ニ添削スルハ手書ニ
書(前記內因取對各々記入調漆添答ニ期ハ)

永要地第三八號

外國船舶不開港出入延期ニ關スル件

昭和拾五年九月廿日

永興灣要塞司令官 松島唯雄



陸軍大臣東條英機殿

首題ノ件ニ關シ九月十一日陸普日第六三三三號ヲ以テ許可相成リタル處別紙ノ通達延ノ爲延期方願出アリタルニ付前同様條件ヲ附シ許可相成度

九月十九日電報セシ分

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

陸軍

元山憲警第壹六壹號

音見書曰

國籍 英國 イングランド サーレイ コーブルム

住所 咸鏡南道徳源郡北城面文坪里

十一番地

ライジングサン石油株式會社文坪油槽所

支配人 ヤーシハニコフク

當四十年

右ハ軍機保護法施行規則第廿一條ニ

基キ外國船舶コンララ號ノ不開港地

タル文坪ニ出入許可申請シ九月十一日

第ニ五八號ヲ許可セラレタルヲ入港運延

ノタメニ依リ九月十九日別紙ノ通り外國

船舶入港日変更願アリタルヲ以テ

調査シタル處變更ノ事由別紙願書
ノ通リニシテ前同許可條件ヲ以テ再
許可然ハルヘキモノト思料ス

昭和十五年九月十九日

元山憲兵分隊長高山茂忠
陸軍大臣 東條英機 殿



(日本標準規格B-4)

8 補遺風書 (前記諸書に付加せるもの)
9 補遺書 (前記諸書に因りて致せるもの)
10 補遺本一冊 (本人及び事務に關連してハテハ二冊ハ)

本館ニ添付スヘキ書類

一、本紙ニ添附スヘキ書類

- 1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
- 2. 病歴書 (流行病基因死歿者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

差 四三六 二

外國船入港日変更願

一、船名 ソーラ号

一、國籍 諾威國

一、入港許可書 第 號 (昭和十五年九月 日付)

一、有効期間 自 昭和十五年九月十一日 至 昭和十五年九月二十五日

一、入港予定日 昭和十五年九月二十日

一、碇泊期間 五日間

一、変更事由 公船「シンガポール」九月一日出港シ文坪(直轄)予定、處陸揚許可書(大藏省)都合ニテ予定ヲ変更シ神戶向ニ今所ヨリ横

濱ヲ至テ入港スル為遲延セシモノニ御座ル
事、事由ヨリ入港有効期限御延期方及御願候也



電 4368

昭和十五年九月十九日

朝鮮咸鏡南道德源郡北城面文坪里訂番地
ライジングサンの石油株式会社文坪油槽所

支配人

George H. H. H. H. H.

陸軍大臣 東條英機 殿

George H. H. H. H.



本館ニ添綴スヘキ書牒
（本館ニ添綴スヘキ書牒）
（本館ニ添綴スヘキ書牒）
（本館ニ添綴スヘキ書牒）

陸普電

副官ヨリ永興湾要塞司令官へ電報

外國船ソラ豫ル出入延期候。九月廿七日迄前

回ト同一條候。テ許可セラレ依命メアヤ

西海軍シムス
リイス

陸普電

二〇四

昭和拾五年九月廿壹日

陸軍

海軍

- 3. 陸軍部 (陸軍部)
- 2. 海軍部 (海軍部)
- 1. 陸軍部 (本人)

本海軍部へ手書

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死歿者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

軍部
15.9.20
午前
官

軍首
15.9.20
497
防衛課

三三三
四三六

電報譯

ル

九月十九日 午前

午後 四時 十分 著

第三二號

陸軍省

宛

發信者

永興灣要塞司令官

九月十日陸軍省第六三三三號許可セラルル外国船内地(議事)

ノ為ニ遅延セラルル就テハ二十三日豫定工事二十七日迄ニ延期

願ヒアリ許可セラレ度

外國船舶ノ内地陸軍省ノ許可

防衛

1. 4368

陸軍

陸軍電信著信紙

文	本	九	定指	著	七
	イ	ツ		リ	七
	ア	キ		ク	七
	ニ	ー		ク	七
	セ	ヒ		ン	七
	ヒ	リ		シ	七
	マ	イ		ヨ	七
	イ	ア		ウ	七
	ロ	六			七
	エ	三			七
	オ	三			七
	リ	キ			七
	ア	ス			七
	イ	タ			七
	セ	カ			七
	キ	ケ			七
	ス	ム			七
	ツ	ナ			七
	エ	イ			七
	ウ	ニ			七
	ソ	ハ			七
		キ			七
		コ			七
		オ			七
		タ			七
		サ			七
		ム			七
		チ			七
		イ			七
		コ			七
		ツ			七
		ア			七
		レ			七
		ニ			七
		三			七
		ヒ			七
		ヨ			七

1. 本紙ニ添附スヘキ書類
1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死歿者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

受信時分
午後 2

時 5 分

技手

陸軍省
15.9.19
有線電信所

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ除キ入院病死者ニ限ル)

保存期限	十年	決裁指定	局長	決行指定	原
政務次官 參與官 回付 決裁前後連帶 課名		受領番號		件名	
壹第四三六八號		外國船舶不開港出入ニ関スル件		起元廳(課)名 ライ社文坪油槽所	
決行(決裁)後 回覽課名		大臣 委		主務局長	
局長		次官		政務次官	
局長		高級副官		參與官	
局長		主務副官		書記官	
局長		主務課員		審案 筆記者	
(裁決)行決 覽回後		主務局長		主務副官 官房御用掛 計	
防衛甲第四一號		昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日	
昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日	
昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日	
昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日		昭和三十五年九月十日	

陸軍

陸普 副官ヨリ出願人へ通牒(永興灣要港司令部) 理由

九月五日

日附出願旨趣ノ件許可セラレタルニ付軍機保護法施行

規則第十八條ニ依リ許可證ヲ交付ス

陸普第六三三三號

昭和五年九月十一日

許可證

258号

朝鮮咸鏡南道徳源郡北城面文坪里ニ番地
ライジングサン石油株式会社文坪油槽所
ゼー・シー・ハンコック

二行 爲 石油及揮發油荷揚ノ爲ノ船舶(ソラ號出入)

一、場所(區域)

朝鮮咸鏡南道徳源郡北城面文坪里

一、本證有效

自昭和十五年九月二十一日
至昭和十五年九月二十二日

一、條

ノ永興灣外麗島沖ニ停船同地ヨリ邦人ハイ
ロットヲ附スベシ

又必要ニ應レ陸軍官憲ヲシテ乗船セシメ船内

ノ檢索容疑物件ノ封印ヲ爲サシムルコトアリ

昭和五年九月十一日



- 3. 申請書 (申請書)
- 2. 申請書 (申請書)
- 1. 申請書 (本人簽字事實ノ品類ニテハ于ク二題ハ)

本條ニ添付スヘキ書類

陸普電

副官ヨリ鎮海灣要塞司令官へ電報

永要地第三五號副申ノ件九月十一日ヨリ九月二十二日
迄前同ト同一條件ニテ許可セラル依命

陸普電 一九五

リクス



966 昭和五年九月十日



陸 軍

永要地第三五號

外國船不開港出入ニ關スル件

昭和拾五年九月六日

永興灣要塞司令官 松島唯雄



陸軍大臣東條英機殿
首題ノ件ニ關シ別紙ノ通出願アリタルニ付
許可相成度

陸軍

一、本紙ニ添附スヘキ書類

1. 戸籍抄本一通 (本人死亡事項ノ記載シアルモノニ限ル)
2. 病歴書 (流行病基因死没者ヲ余キ入完丙死者ニ限ル)

ノリ (ノリニヨリテ作製能ハルノニ)

元山憲政彙 巻五 號

意見書

國籍英國 イングランド サーレイ・コーブハム
住所 咸鏡南道 德源郡 北城面 文坪里 卅番

地

ライジングサニ石油株式会社 文坪油槽所
支配人 ゼーシー・ハンコック

當四十年

右ノ者別紙ノ通り軍機保護法施行規則第
十一條ニ基キ外國船舶ノ不開港地(文坪)
出入許可方申請アリタルニ付調査シタル
處尤記ノ通りニシテ許可可然モント思料ス

尤記

目

的 願書ノ通り

陸



船名	船種	願書ノ通り
國籍並船籍港	右	左
總噸數	右	左
船主ノ氏名及國籍	右	左
傭船者ノ氏名及國籍	右	左
船長ノ氏名及國籍	右	左
碇泊豫定期間	右	左
意見	見	見

昭和十五年九月五日

元山憲兵分隊長高山茂忠太



永興湾外麗島沖ニ停船全
地ニ於テ邦人パイロットヲ附シ
憲兵乗船々内檢索並客疑
物件ノ沒收又ハ封印ヲ條件トス

- 1. 可憐母本一紙 (本人取立事更ハ出願ニテハ于ノ二題ハ)
- 2. 水簿ニ添附スル手書

陸軍大臣東條英機殿

陸軍

(日本標準規格B-5)

四三〇八



外國船舶ノ不開港出入特許願

一、目的
 弊社文坪油槽所（朝鮮咸鏡南道德源郡北城面文坪里十一番地）へ
 油荷揚ノ爲（石油及揮発油）

一、船名
 ノーラ "SOLOR"

一、船種
 機船 M/V

一、國籍
 諾威國

一、船籍港
 オスロー Oslo

一、總噸數
 ハニ六ニ噸

一、船主ノ氏名
 エス・アゲルスタードレグリー汽船會社 諾威國

一、備船者氏名
 アングロサクソン石油株式會社 英國

一、船長ノ氏名
及國籍

オール、アンドリアーソン、
諾威人

一、碇泊豫定期間

十二日間（入港豫定日 昭和十五年九月十一日）

右外國船舶ノ不開港出入ノ儀特許賜度此段及御願候也

昭和十五年 九月 五日

朝鮮咸鏡南道徳源郡北城面文坪里十一番地

ライジングサン石油株式會社文坪油槽所

支配人 ゼー、シー、ハンコック

陸軍大臣 東條英機殿

外國船舶ソーラ號不開港出入特許ニ關スル報告書

- 一、願出人 氏名願書記載ノ通り
- 一、本籍 英國・イギリス・サレーイ・ゴープラム
- 一、現住所 願書記載ノ同番地内 社宅居住
- 一、職業 ライジングサン石油株式會社文坪油槽所 支配人
- 一、年齢 三十九歳 (西曆一九〇〇年十二月廿五日生)
- 一、外國船舶 タンク船 (石油類輸送船)
- 一、船名 ソーラ 號
- 一、始發地 シンガポール
- 一、始發地出發年月日 昭和十五年 九月 一日
- 一、途中寄港地 無し
- 一、船舶ノ總噸數 八三六二噸

一、文坪油槽所 昭和十五年 九月十一日
到着ノ豫定日

一、汽罐及内燃機ノ内容

ドンギー、ボイラーニ基

ディーゼルエンジン、タイフディーゼルエンジン。バーミスター・アンド・エーソン。
カブリエ・アクティグ・ツール・ストワーク。

一、乗組員ノ人数、種別、国籍

四六〇〇馬力

上級船員

一六名 支那 人 (身元調書別表添付)

下級船員

一八名 支那 人
一〇名 支那 人
一〇名 支那 人

一、其ノ他参考事項

初メテ入港スル船隻ニ御座候

右ノ通りニ付御報告申上候

昭和十五年 九月 五日

朝鮮咸鏡南道徳源郡北城面文坪里十一番地

ライジングサン石油株式會社文坪油槽所

John...

CREW LIST FOR M/V "SULOK"CAPTAIN

Name	Ole Andreassen.
Age	45.
Nationality	Norwegian.
Address	Vestre Sandoya Tvedestrand.
Certificate	Master Certificate.
Military Service	None.

CHIEF OFFICER

Name	Fridtof Olsen.
Age	40.
Nationality	Norwegian.
Address	Kristiansands.
Certificate	Masters Certificate.
Military Service	Non.

SECOND OFFICER

Name	Soren Skaugen.
Age	30.
Nationality	Norwegian.
Address	Krabrodstrand Stathelle.
Certificate	1st Mates Certificate.
Military Service	None.

THIRD OFFICER

Name	Leif Ingebrihtsen.
Age	29.
Nationality	Norwegian.
Address	Rektor Steensgt 6 Fremso
Certificate	First mate's certificate
Military Service	None

Wireless Operator

Name	Nils Tonder Lied
Age	20
Nationality	Norwegian
Address	Hovengen Posgrunn Oslo
Certificate	First Class Certificate
Military Service	None

Chief Engineer

Name	Alfred S. Kolsto
Age	46
Nationality	Norwegian
Address	KerKegaten 219 Hangesund.
Certificate	Chief Engineer's Certificate
Military Service	None



Second Engineer

Name	Oscar Kjell Fossell
Age	31
Nationality	Norwegian
Address	Aubertsgt 9 Sorten
Certificate	Second Engineer Certificate
Military Service	None

Third Engineer

Name	Leeanthy
Age	39
Nationality	Chinese
Address	A.P.Co.Singapore
Certificate	First Class Engine Driver Certificate
Military Service	None

For THE RISING SUN PETROLEUM CO.,LTD

B U M P Y O

J. H. ...

第 四 號



高山

醫務

閱

調外第一九〇號

昭和十五年九月二十五日

四六三二

日本赤十字社社長 公爵 徳川 閑

陸軍次官 阿南 惟 幾 殿

之實

軍務課 15.9.26

陸軍省 15.9.26

陸軍省 15.9.27

拜啓 赤十字國際委員會ヨリ俘虜ノ待遇ニ關スル條約ニ付左記書類
ヲ接受致候ニ付右寫及御送付候間可然御取計相成度候 敬具

記

- 一、日本赤十字社社長宛赤十字國際委員會員、中央委員會長ジャック シュヌヅィエール氏書翰
- 二、政府宛赤十字國際委員會長マックス・ヒューバー氏書翰
- 三、俘虜ノ待遇ニ關スル一九二九年七月二十七日ノ條約加盟國表

イ、昭和十二年一月十日勸州國資工官合資會ニ於テ是レノ條約ニ署名シテ同月二十日陸軍省

日本赤十字社

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例

(但シ軍屬等ニ在リテハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

イ、昭和十二年一月十日滿洲國濱江省哈爾濱ニ於テ猩紅熱ニ罹リ同月二十日哈爾濱陸軍

譯文

一九四〇年八月二十一日

赤十字國際委員會員

中央委員會長 ジャック・シュヌヴァイエール

社長 宛

拜啓 赤十字ノ多クノ活動ヲ鼓吹スル條約ノ普遍的承認ハ各國民ノ精神ニ好マシキ影響ヲ及ホス性質ノモノナルコトヲ知り且又最近ノ戰爭犠牲者力是等ノ條約カ各交戰國ニ依リ適用セラレタル事實ニヨリ如何ニ恩惠ヲ受ケタルカヲ觀察シタル赤十字國際委員會ハ(一)戰地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ狀態改善並ニ(二)俘虜ノ待遇ニ關スル一九二九年七月二十七日ノジュネーヴ條約ヲ自國領土内ニ於テ未タ實施セサル各國ニ對シ訴フルノ義務アリト思考致候 仍テ國際委員會ハ是等各國カ國際的相互扶助ノ精神ニ基キ右ノ條約ニ加入又ハ場合ニ

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例

(但シ軍屬等ニ在リテハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

イ、昭和十二年一月十日滿洲國濱江省哈爾賓ニ於テ猩紅熱ニ罹リ同月二十日哈爾賓陸軍

(田中納)



依リテハ之ヲ批准セラル、様懇請仕候 日本國ハ戰地軍隊ニ於ケル
傷者及病者ノ狀態改善ニ關スル條約ハ既ニ之ヲ批准セラレ候モ俘虜
ノ待遇ニ關スル條約ハ之カ調印ノミニテ未タ批准ヲ了セラレス候
貴國政府宛發送ノ書翰ノ寫茲ニ同封御送付申上候間貴社カ右ノ書翰
ヲ支持セラレ既ニ戰爭犠牲者ノ狀態改善ニ多大ノ貢獻ヲナセルジユ
ホーヴノ二條約カ貴國ニ於テ法的效力ヲ發生シ得ル爲政府ニ對シ有
力ナル懇請ヲナサル、様切望致候 敬 具

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例

(但シ軍屬等ニ在リテハ傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

イ、昭和十二年一月十日滿洲國濱江省哈爾濱ニ於テ猩紅熱ニ罹リ同月二十日哈爾濱陸軍

譯文

一九四〇年八月六日

赤十字國際委員會長 マックス・ヒューバー

外務大臣 宛

拜啓 現時ノ苦痛ト苦難ハ俘虜ノ待遇ニ關スル一九二九年七月二十七日ノ條約ヲ全世界ニ實施スルノ必要ヲ愈々痛感セシメ候 赤十字國際委員會ハ其ノ規約及數次ノ國際會議ニ依リ赤十字ノ世界普遍性カ達成セラレ其ノ道義的的法律的の原則カ全世界ニ普及適用セラレムコトヲ監視スルノ任ヲ有スルモノニ有之候間國際委員會ハ右條約ノ調印ト能フル限り多數ノ國家内ニ於ケル之カ實施ノ確保ニ常ニ專任致候 而シテ多數ノ國家カ右ノ條約ノ批准ヲ了シ他ノ諸國家ハ之ニ加入ヲ

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例

(但シ軍屬等ニ在リテハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

イ、昭和十二年一月十日滿洲國濱江省哈爾濱ニ於テ猩紅熱ニ罹リ同月二十日哈爾濱陸軍

聲明致候(附錄別表參照) 數次ノ國際會議ニ於ケル長期ニ互ル周到

ナル討議ノ成果タル該條約ニ關シテハ國際委員會ハ何等説明ノ要ナキヲ認ムルモラニ候ヘトモ該條約ニ靈感ヲ與ヘタル人道主義的諸原則力最近ノ戰爭ヲ通シテ勝利ヲ得交戰各國ニ依リ尊重セラレタルコトヲ茲ニ言明スルヲ得ルト信スルモノニ有之候

加之一九三九年九月以來右條約ノ適用ニ關シ國際委員會ノ得タル諸經驗ハ該條約ノ實際的效用ト深キ道義的價值トヲ立證致候

一九二九年ノジュネーヴ條約關係國ニ俘虜法典ノ制定ヲ鼓吹セル諸動機ハ該條約ノ緒言中ニ表現セラレ居候 即チ

「戰時ニ於テ能フル限り避ケ難キ戰爭ノ慘禍ヲ輕減シ俘虜ノ運命ヲ緩和スルハ凡テノ國家ノ義務ナルコトヲ認メ」

「海牙國際條約特ニ陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約ヲ鼓吹セル諸原則ノ發展ヲ希望シ」云々

右ノ緒言ニ於テ新條約ハ之ニ其ノ基礎的諸原則ヲ與ヘタル一九〇七

5. 死亡證明書（流行病基因死死者及流行病基因以外ノ入院死死者ヲ除ク）
 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例（但シ軍屬等ニ在リテハ傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由
 イ、昭和十二年一月十日南州野戰工廠官舎前ニハミニ...

年ノ海牙條約ノ補遺發展ナルコトヲ明言セラレ居候
 日本國ハ俘虜ノ待遇ニ關スル條約ニ調印セルモ未タ之カ批准ヲ了セ

ラレス候間國際委員會ハ大臣閣下カ今後該條約ノ「批准」ヲ行フハ
 有利ナルヤ否ヤヲ吟味相成様切望致候
 條約ノ寫一部附録ニ添附致候

俘虜法典第九十一條ニ依レハ批准ノ書類ハ在ベルン瑞西聯邦會議ニ
 提出スル様規定セラレ居候 近キ將來ニ於ケル大臣閣下ノ御返翰ヲ
 豫メ期待シツ、閣下ニ對シ最高ノ敬意ヲ表シ候
 敬具

(田中納)





5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書
 一、死亡事由記載例 (但シ軍屬等ニ在リテハ傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由
 イ、昭和十二年一月十日南州國資工省合備員ニシテ工員ニ任ズル者ノ死亡事由)

俘虜ノ待遇ニ關スル一九二九年七月二十七日ノ
 條約加盟國

國名	批准年月日
アデン	一九三九年 四月 一日
南阿聯邦	一九三一年 六月廿三日
獨逸	一九三四年 二月廿一日
濠太刺利	一九三一年 六月廿三日
奧地利	一九三六年 三月十三日
白耳義	一九三二年 五月十二日
ビルマ	一九三七年 四月 一日
ボリヴィア	一九三五年 八月十五日
伯刺西爾	一九三二年 三月廿三日
ブルガリア	一九三七年 十月十三日
加奈陀	一九三三年 二月二十日



5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例 (但シ軍屬等ニ在リテハ傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

イ、昭和十二年一月十日滿洲國濱江省哈爾濱ニ於テ星江熱ニ罹リ司月二トヨ合爾等ニ在リ

智利	一九三三年 六月 一日
支那	一九三五年十一月十九日
コロンビア	
玖馬	
丁抹	一九三二年 八月 五日
ドミニカ	
埃及	一九三三年 六月廿五日
西班牙	一九三〇年 八月 六日
エストニア	一九三六年 六月十一日
北米合衆國	一九三二年 二月 四日
芬蘭	
佛蘭西	一九三五年 八月廿一日
英吉利	一九三一年 六月廿三日
希臘	一九三五年 五月廿八日



又し言聞書（シテ非ス区列死者及シテ非基区以外ノ入院死歿者ヲ除ク）

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診断證明書

一、死亡事由記載例

（但シ軍屬等ニ在リテハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス）

イ、昭和十二年一月十日滿州製鐵工省合爾資ニシテ星工執ニ星ノ司手ニシテ...

（田中納）

洪牙利	一九三六年 九月 十日
愛蘭自由國	一九三二年 八月 五日
アイスランド	
伊太利	一九三一年 三月廿四日
日本	
ラトヴィア	一九三一年 十月十四日
リスアニア	一九三九年 二月廿七日
ルクセンブルグ	
墨西哥	一九三二年 八月 一日
ニカラガ	
諾威	一九三一年 六月廿四日
新西蘭	一九三一年 六月廿三日
和蘭	一九三二年 十月 五日
波斯（イラン）	



4 死亡訃聞書 (流行病基因死歿者及流行病基因以外ノ入院死歿者ヲ除ク)

5. 除隊後ノ死亡者ニ在リテハ地方醫師ノ診斷證明書

一、死亡事由記載例 (但シ軍屬等ニ在リテハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル當時ノ任務及死亡事由ヲ成ルヘク詳記スルモノトス)

波 蘭	一九三二年 六月廿九日
葡 萄 牙	一九三一年 六月 八日
ルーマニア	一九三一年 十月廿四日
シヤム	一九三九年 六月 三日
スロヴァキア	一九三九年 九月十五日
瑞 典	一九三一年 七月 三日
瑞 西	一九三〇年十二月十九日
チエッコスロヴァキア	一九三七年 十月十二日
土 耳 其	一九三四年 三月 十日
ウルグアイ	
ヴェネズエラ	
ユーゴスラヴィア	一九三一年 三月二十日

COPIE

CR 186
JES/AU

21 août 1940

Monsieur le Président,

Conscient qu'une reconnaissance universelle des Conventions qui inspirent la plupart des activités de la Croix-Rouge sera de nature à exercer une influence favorable sur l'esprit des peuples, et considérant combien les victimes des dernières guerres ont bénéficié du fait que ces Conventions ont été appliquées par les belligérants, le Comité international de la Croix-Rouge a cru de son devoir de s'adresser aux Etats qui n'ont pas encore mis en vigueur sur leur territoire les Conventions de Genève du 27 juillet 1929,

- a) pour l'amélioration du sort des blessés et des malades dans les armées en campagne,
- b) relative au traitement des prisonniers de guerre.

Il a prié ces Etats de bien vouloir, dans un esprit de solidarité internationale adhérer à ces Conventions ou, selon le cas, procéder à leur ratification.

Le Japon a ratifié la Convention pour l'amélioration du sort des blessés et des malades dans les armées en campagne et signé la Convention relative au traitement des Prisonniers de Guerre, sans cependant avoir jusqu'ici ratifié cette dernière.

Au Comité Central de la
Croix-Rouge Japonaise
5, Shiba Park
T O K I O

En vous transmettant sous ce pli copie de la lettre que nous venons d'adresser à votre Gouvernement, nous vous prions de bien vouloir lui donner votre appui auprès des instances qualifiées afin que les deux Conventions de Genève, qui ont déjà tant contribué au soulagement du sort des victimes de guerre acquièrent force de loi dans votre pays.

Veillez agréer, Monsieur le Président, avec nos remerciements anticipés, l'assurance de notre haute considération.

Jacques CHENEVIÈRE
Membre du C.I.C.R.
Président de la Commission Centrale.

Annexe: 1 copie

CR 186
JES/HL

6 août 1940.

Excellence,

Les souffrances et les angoisses de l'époque que nous vivons font ressortir la nécessité de voir mise en vigueur dans tous les pays la Convention du 27 juillet 1929 relative au traitement des prisonniers de guerre.

Appelé tant par son statut que par plusieurs Conférences internationales à veiller à ce que l'universalité de la Croix-Rouge soit atteinte et que ses principes moraux et juridiques soient diffusés et appliqués dans le monde, le Comité international de la Croix-Rouge a toujours été préoccupé d'assurer la signature de cette Convention et sa mise en vigueur dans le plus grand nombre d'Etats possible.

Or, un nombre très important d'Etats ont ratifié la Convention mentionnée; d'autres ont déclaré leur adhésion (voir liste annexée).

Le Comité international de la Croix-Rouge croit pouvoir se dispenser de tout commentaire au sujet de cette Convention qui est le résultat de délibérations, longues et approfondies, de plusieurs Conférences internationales; il s'estime cependant autorisé à déclarer qu'à travers les dernières guerres les principes humanitaires inspirant cette Convention ont triomphé et ont été respectés par les belligérants.

De plus, les expériences que le Comité international de la Croix-Rouge a faites, depuis septembre 1939, dans l'application de la Convention en question, ont démontré son utilité pratique et sa haute valeur morale.

Son Excellence
le Ministre des Affaires étrangères
du Japon
T O K I O.

Les motifs qui ont inspiré aux participants à la Conférence de Genève de 1929 l'établissement d'un Code des prisonniers de guerre sont exprimés dans le préambule:

"Reconnaissant que, dans le cas d'une guerre, il sera du devoir de toute Puissance d'en atténuer dans la mesure du possible les rigueurs inévitables et d'adoucir le sort des prisonniers de guerre,

"Désireux de développer les principes qui ont inspiré les Conventions internationales de La Haye, en particulier la Convention concernant les lois et coutumes de la guerre"....

Ce préambule indique expressément que la nouvelle Convention complète et développe la Convention de La Haye de 1907 dont elle adopte les principes fondamentaux.

Etant donné que le Japon a signé la Convention relative au traitement des prisonniers de guerre sans l'avoir encore ratifiée, le Comité international de la Croix-Rouge se permet de prier Votre Excellence de bien vouloir examiner s'il n'y aurait pas avantage à procéder dès à présent à la

R A T I F I C A T I O N

de cette Convention.

Un exemplaire de la Convention est annexé à ce pli.

Aux termes de l'article 91 du Code des prisonniers de guerre, l'instrument de ratification devrait être déposé auprès du Conseil fédéral suisse à Berne.

En nous félicitant d'avance de la réponse dont Votre Excellence voudra bien nous gratifier dans un proche avenir, nous La prions d'agréer l'expression de notre très haute considération.

Max HUBER
Président.

Annexes: 1 liste
1 exemplaire de la Convention.

Liste des Etats participant à la Convention du
27 juillet 1929 relative au traitement des pri-
sonniers de guerre.

Etats	Date de ratification ou d'adhésion
Aden	1er avril 1939
Afrique du Sud	23 juin 1931
Allemagne	21 février 1934
Australie	23 juin 1931
Autriche	13 mars 1936
Belgique	12 mai 1932
Birmanie	1er avril 1937
Bolivie	15 août 1935
Brésil	23 mars 1932
Bulgarie	13 oct. 1937
Canada	20 févr. 1933
Chili	1er juin 1933
Chine	19 nov. 1935
Colombie	
Cuba	
Danemark	5 août 1932
Dominicaine (République)	
Egypte	25 juil. 1933
Espagne	6 août 1930
Estonie	11 juin 1936
Etats-Unis d'Amérique	4 févr. 1932
Finlande	
France	21 août 1935
Grande Bretagne	23 juin 1931
Grèce	28 mai 1935
Hongrie	10 sept. 1936
Inde	23 juin 1931
Irlande (Etat libre d')	
Islande	5 août 1932
Italie	24 mars 1931
Japon	
Lettonie	14 oct. 1931
Lithuanie	27 févr. 1939
Luxembourg	
Mexique	
Nicaragua	1er août 1932